

解答解説 (全5問)

問1

解答 2

1. 誤り。郵送調査法は、郵送という手段を使うため遠隔地までの調査が可能で、調査対象者が広範に及ぶ場合は有効な方法である。しかし、調査対象者に調査票を返送してもらわなければならないため、回収率が低くなるという欠点がある。
2. 正しい。配票調査法(留め置き法)は、調査員が調査対象者宅や職場などを訪問して調査票への記入を依頼し、後日再訪問して回収する方法である。調査対象者には質問に回答する十分な時間が与えられ、多量の質問にも向いている。
3. 誤り。郵送調査法は、調査票を郵送で送付し、あとに返送してもらったり、調査員が取りに行くなどして回収する方法であるが、集合調査法のようにその場で調査票を配布し、その場で記入してもらって回収する方法に比べて、回収率が低くなる傾向がある。
4. 誤り。電話調査法では、調査対象者から調査員の姿が見えないため、一般にプライバシーにかかわる質問には抵抗感を感じやすく、適しているとは言えない。
5. 誤り。事例調査は、限られた少数の調査対象者に対し、主観的に調査を行って普遍的原理を見出す方法である。対象者が少ないため、客観的な情報を収集するには適していない。

問2

解答 8

1. 誤り。悉皆調査は、調査対象者の全員をくまなく調査するものである。調査対象者の中から一部分の人を選んで調査し、その結果から全員(母集団)について推定を行う調査は標本調査という。
2. 誤り。郵送調査法は、調査対象者に調査票を郵送して記入を依頼し、記入した調査票を返送してもらう方法で、遠隔地の対象者を調査する場合に便利であるが、本人以外の記入や誤解・誤記入などの危険性がある。
3. 正しい。配票調査法は、調査員または現地の人を通して調査対象者に調査票を配布し、一定期間内に、対象者自身が調査票を返して記入し、記入された調査票は、調査員その他の人を通して回収するが、回収の際に内容を他者に見られないように封筒を添付して郵送で回収するなど、回収方法工夫をしてプライバシー保護に配慮する必要がある。
4. 誤り。参与観察法は、調査者自身が対象集団の一員となって、長期にわたり生活を共にしながら、内部から集団を観察する方法である。一方、非参与観察法は調査者が部外者あるいは第三者として、調査対象を観察する方法であるため、観察の対象者に警戒されないように注意する必要がある。
5. 誤り。自由面接法では、面接をしながら記録をとることは難しく、記録に集中してしまうと調査対象者からの重要な言葉を聞き漏らす可能性がある。録音や録画のための機器を活用すれば、面接のあとで文字化することも容易であるが、個人情報を取り扱うことになるので必ず調査対象者の了承を得ることが必要である。